

日本歴史学会編集

日本歴史

2021年
5月号

第876号

今井昭彦著

『近代群馬と戦没者慰霊』

白川哲夫

本書の著者である今井氏は、近代日本の戦没者慰霊・追悼に関する研究をこれまで『近代日本と戦死者祭祀』（東洋書林、二〇〇五年）、『反政府軍戦没者の慰霊』（御茶の水書房、二〇一三年）、『対外戦争戦没者の慰霊』（同、二〇一八年）の「三部作」

にまとめてきた。今回はその成果を踏まえつつ、氏の研究の原点となった群馬県の事例を中心にして、戦没者慰霊に関する「通史」をあらためて示しているものである。「はしがき」で著者自らが述べているように、これまでの著作とは趣を異にしており、前著と重複する内容もあり、一般の方々向けとするため註を割愛したという。また本文中でもキーとなる部分を頻繁にゴシック表記するなど、学術書ながら一般向け、初学者向けの配慮が明確なものとなっている。章の構成は以下の通りである。

序章 カミとホトケ

第一章 軍都高崎の創設と慰霊施設

第二章 日清・日露・シベリア戦

第三章 陸軍特別大演習と高崎忠霊塔

第四章 群馬県護国神社の創建

第五章 日米開戦と忠霊塔建設

第六章 太平洋戦争下の戦没者と慰霊施設

設

第七章 忠霊塔建設の諸相

終章 戦没者はカミかホトケか―靖国祭祀の限界―

序章では、戦没者を「ホトケ」として

祀っている事例として寺院に安置されている戦没者の木像を紹介するとともに、群馬県で建立された忠魂碑・戦役記念碑・軍馬関係碑の一覧を表で示している。その内容は、これまで著者が積み重ねてきた膨大な調査の一端を早くもうかがえるものとなっている。強調されているのは、戦没者は靖国神社に「カミ」としてまつられる以外に、地域では「ホトケ」として認識されており、その意味で当局が説明する戦没者慰霊の枠組みは矛盾を抱えていたということである。

第一章からは時代を追って群馬県の戦没者慰霊について叙述される。第一章では戊辰戦争から西南戦争まで、第二章は日清戦争からシベリア戦役まで、第三章は満洲事变から昭和初期の状況、第四章は日中戦争期、第五章は日米開戦の時期、第六章は太平洋戦争全般とそれぞれに示され、第七章では群馬県での忠霊塔建設の広がりについてまとめられている。以下、各章の内容について紹介する。

第一章では戊辰戦争の戦死者を祀った館林招魂社の創設、高崎での陸軍部隊創設に伴う高崎陸軍墓地（埋葬地）の設置、さら

に西南戦争直後に現在の前橋市に創設された厩橋招魂祠（招魂社）の事例が紹介されている。館林招魂社は藩の枠組み、高崎陸軍墓地は近代軍隊、厩橋招魂祠は群馬県全体、と祀る対象がそれぞれ違っていることがわかる。第二章では、日清・日露戦役後には前橋に彰忠碑（忠魂碑）が建立され、また高崎などでは「英霊殿」と呼ばれる慰霊施設が建立されたことが示される。第三章では、群馬県に特徴的だという忠霊塔の建設や、昭和天皇の「御大典」記念碑や新田義貞挙兵六〇〇年記念碑など戦争以外の記念碑にもふれられる。そして満洲事变後の高崎陸軍墓地における新たな戦死者への対応や、忠魂碑をはじめとする建碑が一九三四～三六年にかけて群馬県内で相次いでいたことを指摘している。ここでは戦争とともに国家的行事や地域の歴史を顕彰する動きが、モニユメントの建設へと結実していくところまで話が広がっている。

第四章では、第三章の動きがさらに展開していくとともに、群馬県での護国神社創建について示している。第五章では群馬県関連として真珠湾攻撃の「九軍神」の一人、岩佐直治に関する地元での慰霊にふれると

ともに、忠霊塔など忠霊顕彰運動が日米開戦前後に繰り広げられたことを述べている。第六章では敗戦に至るまでの戦没者が激増していく様子を示すなかで、群馬県での空襲被害などにも言及し、その慰霊碑も紹介している。第七章では群馬県内各地の忠霊塔建設の事例を戦後の状況も含めて明らかにしている。そして終章では著者の従来の主張を改めてまとめる形で、近代日本の戦没者は「靖国ビラミッド」の形で祀られながらも、地域では戦没者を「ホトケ」として位置づけようとしたとして、靖国祭祀の限界を指摘している。ここにさまざまな矛盾が生じたというのである。最後に今後の課題として、「靖国ビラミッド」は依然存続しているが、それは世代交代による「無縁化」などにより、大きく揺らぎはじめていることを指摘して締めくくっている。

さて本書の意義は、県という単位で戦没者慰霊についてその通史をまとめたところにある。これまでさまざまな慰霊施設や行事の研究があったが、どうしても府県を単位にするという個別研究の形をこえることが難しかった。しかし長年の著者の蓄積がこれを可能にしたのである。そしてこのように

形でまとめられてみると、地域の戦没者慰霊のあり方を決定する要因がいくつか見えてきたように思う。第一は戊辰戦争に至る幕末段階での地域（藩）の動向である。群馬県の場合は館林に招魂社ができることとなるが、当初は藩閥係者を対象としていたものに地域出身の戦没者もあわせて合祀していくという流れになる。第二は軍部隊の設置状況である。群馬県においては「軍都」としての高崎を中心に慰霊施設が展開していく。第三は群馬県の特徴として著者が指摘している、忠霊塔や「英霊殿」の建立というような、いわば地域の「個性」である。これらの決定要因が重層的に表れてくるのが、地域の戦没者慰霊といえそうである。他府県の事例も整理されていけば、こうしたあり方を比較検討して類型化することも可能になるだろう。

域のイデオログ的な人物がいたのか、あるいは地域の宗教事情が関連しているのか、なお解明すべきことが残されているようである。さらには陸軍特別大演習などの天皇と地域との結びつきや、新田義貞という地域史（郷土史）の語りとの関連性を含め、今後「戦没者慰霊」の歴史を叙述するにあたっては、留意すべきことが多々あるようだ。

著者が終章で展開した主張は、基本的には三部作を踏まえたものといえる。その是非はひとまずおくとして、本筋に明確にすべきだったのは、群馬県の事例は戦没者慰霊の通史を踏まえると、どのような事例として評価されるのかだったのではないだろうか。いずれにしても戦没者の慰霊・追悼研究について、後学が取り組むべきさまざまな課題が示唆されている内容といえるし、その意味でも初学者を意識して本書が編まれたというのは非常に意義深いといえるよう。

（しらかわ・てつお 京都府立京都学・歴史館資料課主事）
（菊判、三六〇ページ、七四八〇円、御茶の水書房、二〇二〇・三刊）